

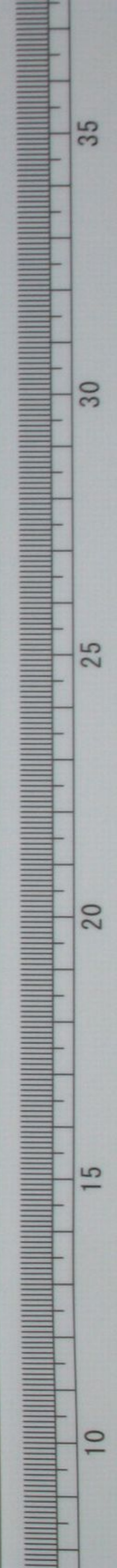
朝鮮書信

春城雜纂

二十八

甲

特別
14
1919
692



門 14 1919 77
 15 1880 53

692

○韓廷の諸臣

當時朝鮮全國の人情たる利害も理非も亦く只魯外國交際を嫌忌しこれかため今日迄僅ま交際跡を存しゆる者の日本支那の兩國のみあるが此中よても日本人は西洋外夷の奴隸と爲り聖人の道と棄て耶蘇の邪教に沈溺し衣服頭飾髪の色まで既と化して夷とありざる者共おぼとて夷論家は夷視せられ遂に今般の如き奇禍をも蒙りざるまどあり一般の人心攘夷論を喜ぶのみならず在廷執權の大臣以下小吏使丁に至る迄何れも鎮撫家かざるをかし併し朝鮮人も日本の誘導より初めて近代文明の光を見し以來既十年近く中に活眼の有志もありて西洋日新の文明を欽慕する者あきま非せと雖ども實は寥寥として晨星の如く當時全國中よて廿四五名に過ぎず隨て其勢力も亦極めて微々たるものにく唯幾は具員として官に在るものよし現在の政府に在て政權を左右する者ハ悉皆保守頑固黨れ人々にて左の數名と其中にて重立するものなりと云ふ

- 領議政(太政大臣) 洪淳穆 年餘六十餘
- 左議政(左大臣) 金炳國 同 六十餘
- 右議政(右大臣) 宋近洙 同 六十餘
- 輔國大夫 閔台鎬 同 五十餘
- 同 閔謙錫 同 五十餘

參判

以上皆頑固黨の首領とも云ふ可き人よて當路の執權たりと雖ども就中兩閔氏は勢力極めて強く陰然首相の地位よ立つ者のよし又全國廿餘名の改進黨の姓名ハ左れ如し

- 輔國大夫 從一品 李載元(國王の從弟)同廿七
 - 軍務司領官 從二品 尹雄烈 同四十三
 - 參判 從二品 閔泳翊 同廿五
 - 駙馬都尉上輔國 從一品 朴泳孝(國王の姻)同廿四
 - 參判 從二品 趙準永 同五十
 - 參判 從二品 金宏集 同四十
 - 參議 正三品 洪英植 同廿八
 - 承旨 同 嚴世永 同四十六
 - 同 趙秉稷 同五十六
 - 同 高永喜 同三十五
 - 同 朴泳教 同三十五
 - 同 魚允中 同三十六
 - 同 金王均 同三十三
 - 同 申箕善 同三十四
 - 同 李祖淵 同三十八
 - 同 趙秉植 同廿八
 - 同 徐光範 同廿四
 - 同 李道宰 同廿五
 - 同 柳定秀 同廿六
 - 同 安宗洙 同三十四
 - 同 李重斗 同廿五
 - 同 洪普裕 同三十八
 - 同 尹泰峻 同四十
- (官名不詳)
 此外ハ貴族某の子息 兪吉濬 尹雄烈の子息 尹致美 等の改進黨あり

昭和十六年十月五日寄
 市島謙吉氏贈

○元山津の急報 朝鮮居留地護衛艦警備艦一昨日馬に入港したるに依り元山津領事館事務代理外務三等屬奧義制氏より左の電報外務省へ到達しより

今日廿三日朝鮮兵士暴擧公使館を焼く我方三四名彼れ數十名死す公使の仁川出張中翌日王宮を攻入り三大臣一名と米倉の長官殺さる其原因の兵士より米を渡さず我にのみ厚くしたるを怒れるあり賊之城門を固の商人の外入れを平定するや否今に分るす右之辨察官より聞く碇泊の警備艦明朝出帆馬關にて食品を積み直り仁川より往く當港居留人保護のため至急軍艦廻されし

然るも此警備艦への公使は既に歸國しあき仁川へ進航するまを合せ即刻釜山へ進航去同港の景況及び京城の形勢等を聞合せ再び馬關へ歸航し其上にて更に警固の爲先直り元山津へ進航する様東京より電報よて達せらるるよし馬關より釜山への往復の凡三日も掛る可きに付今日内より警備艦馬關へ歸着し釜山の様子を電報よて申來ることからんと云

より其の禍苗のありたるものと見之別は朝鮮仁川より達したる去月十日發れ通信に依れと頃者京城東大門の傍ある外濠水門の一の大いなる貼札を爲さる者あり其文の旨意に依れば即ち曰く東夷日本人居留下都監は日あふせして我が義徒の燒拂ふ所とある可きに付近傍の民家は豫め其用意を爲し延焼の虞に備ふる所あるべし若し將に此の變に付其の患を免れんと欲せば韓錢四十貫文を齎らま之れを義徒に納るべし云々と此の貼札を見て同近傍の人民は大いに恐怖し俄かに隣閭の人々相會して眉を蹙め頭を疾しめつゝ若しも彼の貼札の如く一朝大變災にても被ふるが如きことあらば我々不幸と果して如何計りぞや諺も曰ふ不仁の極は兵火水旱に刺史の酷虐ありと何も身代の爲してのよと故爰互に耐忍せしむ多少の貢金は捐てねばあるまじと遂に一同の相談も調ひ毎若千づゝは醜金をなし各町合ひせて二貫文の錢を得一日人々の之れを彼の東大門外の水閘の柱に掛け置きたるは笑止や一夜過ぎ二夜過ぎて既に數日を聞ゆるも猶ほ之を取り去る者無く二貫文の依然として水勢激烈ある水門の柱頭を繋ぎ居るにぞ人民の又怪しみて個は金額の不足ある故に敢て之を

○朝鮮暴徒の性質 七月廿三日京城よて我公使館を襲撃したる暴徒の性質は如何様のものある固より未だ審からんと雖とも或る朝鮮人の説に京城在營の常備兵の平日七千七百餘名あることあるが一昨午日本より堀本中尉入京後五百人を撰抜して傳習兵とし入費を惜まざり充分の手當を爲し専ら日本式の練兵に從事したるより在來の常備兵等之を妬み均しく護國の兵士として新式と舊式との間お政府が待遇は厚薄斯の如く甚しきは其意を得ずとて平日苦情の絶間おかりしが此度元山津與外務三等屬よりの電報中に手當の薄きを怒り暴發し兵士等米倉を襲ひ米粟は長官を殺したるとあるを見れば廿三日は京城在營の常備兵が政府に不取扱を口實に一揆を起し政府に迫る序お西洋兵式傳習の根本なる日本公使館をも襲ひたる事あらんか左すれば五百名の傳習兵之無論此一揆に敵對しふるあるべし而して衆寡甚しき懸隔ありとは雖も弓矢火繩筒の舊式兵が新式兵に抵抗するまとは六千數ゆるへしと聞く儘を記して看官の參考に供す

○朝鮮暴動前の報 朝鮮の變に付て兼ねて數日前

取去らざるよや遮莫れ家屋も燒かれん四十貫文の大金の今更整ひ様をしとて其後人民の心を決して彼の二貫文をを取戻し來せり然るも又程經て同月四日の夜竊りに我公使館の衡門は同様の貼札を爲したる者あり我公使館の人々らの何者の狂人が斯るまをば爲すことぞとて更らよ心おも掛けられぬありしが爾來韓民は大いに恐怖の心を懷きて流言百出巷間に傳へて人心頗る恟々たる様子ありとのとありと立憲政黨新聞に見ゆ

朝鮮政略備考

朝鮮ノ政略ハ爾後ノ詳報ヲ得ズシテ特ニ記ス可キモノモ非カレバ昨日ヲ以テ暫ク筆ヲ闔シタレバ我輩ガ曾テ該國ノ事情ニ付キ探索シ得タルモノアレバ今回ノ序ヲ以テ其一ニテ記載シ朝鮮政略備考ト題シテ讀者ノ一覽ニ供セントス固ヨリ直ニ昨今ノ事變ニ關スルモノニハ非カレバ彼ノ國情ヲ詳ニスルハ今日ニ在テ徒勞ニハ非サル可シト信スルナリ

朝鮮國ノ地理人口等ノ事ニ付テハ様々ノ説アレバ其實ハ詳ナラズ人口ハ先ツ日本國ノ三分一乃至半ト云テ當ラズト雖モ遠カラザルコトナラシテ八道ト爲ス日京鐵道

日忠清道曰慶尙道曰全羅道曰平安道曰黃海道曰咸鏡道曰
江原道是ナリ忠、慶、全、ハ國ノ南方ニ當テ平ト貴トハ西方
ニ在リ之ヲ三南兩西ト稱ス咸ハ北ニ邊シ江ハ東ニ位シ京
畿ハ則チ諸道ノ中央ニシテ京城ノ在ル所ナリ

右各道ノ人情氣風ヲ觀察シテ概評テ下ダスキハ江原ノ人
ハ溫柔質朴ニシテ鈍滯堅忍ノ風アリ、咸鏡ノ人ハ剛壯ニ
シテ智アリ、全羅ノ人ハ狡猾ニシテヨク權勢ニ趨ル、慶尙
ノ人ハ固陋強悍ニシテ然カモ文ヲ好ミ、京畿忠清ノ人ハ
概シテ文弱ノ識ヲ免カレ難シ、獨リ人物勇ニシテ武ヲ喜
ヒ男兒ノ氣象ニ富ム者ハ平安道ノ人ニシテ或ハ國力ノ存
スル處ト云フモ可ナリ黃海道ニ至テハ其人氣平安ニ彷彿
タリト雖也之ニ及ハザルヲ遠シト云フ

國人ノ種族ヲ五等ニ分ツ第一貴族、累世公卿ノ子孫ニシ
テ政府最上ノ官ニ就ク可キ者ナリ其數凡ソ一千戸モアル
可キ歟未詳大抵皆京城ニ住居ス或ハ忠清道慶尙道江原道
ニ家スル者モアレ其數僅々ノミ、此一千ノ貴族貧富一
様ナラズ隨テ教育モ亦齊シカラズ名ハ貴族ニシテ其
實ハ寒族ナルモノ多シ、事實勢力ヲ有シテ顯官ニ昇ル者
ハ京城ノ貴族中ニ凡ソ一百家モアル可キノミ但シ朝鮮ノ
貴族ハ其生活教育ノ法都テ他族ニ異ナラズシテ交際モ廣
口實ヲ設ケテ之ヲ避ルト云フ亦以テ其交際ノ無理ニシテ

往々掠奪同様ノ惡風俗アルヲ窺見ル可シ
以上五族ハ其區別甚タ嚴ニシテ嘗テ之ヲ紊ルコトナシ其交
際モ自カラ同族中ノ交際ニシテ少年竹馬ノ遊戲ニテモ相
互ニ分ル、モノ、如シ就中男女娶嫁スルニ他族ヨリセザ
ルノ慣行ニシテ此慣行決シテ動カス可ラズ上下ノ別嚴ナ
リト云フ可シ之ヲ要スルニ貴族ハ士族ヲ壓シ士族ハ中族
ヲ制シ中族ヨリ郷族以テ常民ニ及ビ常民ハ恰モ四重ノ壓
力ニ當ルモノナレバ其運動ノ不自由ナル論ヲ俟タズシテ

明ナリ常民ハ耕織シテ租稅ヲ納メ他ノ四族ハ逸シテ衣食
スル其情況ハ殆ト封建時代ノ我日本ニ異ナラズ但シ此四
族モ非役ナレバ常祿ナシト雖也常民ト雜居シテ便利ヲ得
ルコト少ナカラズ例ヘバ田舎ノ地方ニ士族ノ住居スル者ア
レバ恰モ其村落酋長ノ体ヲ成シ田土ヲ耕スニモ村民ヲ役
ス可シ村民ニ地ヲ貸セバ其地代ニ當テ不納アルコトナシ或
ハ村民ニ薪炭ヲ納メシメ牛ヲ牧セシメ甚シキハ已ガ私用
ニテ他行スルモ無償ニテ駕籠ヲ擔カシムルニ至ルモノア
リ何レモ皆常祿ニ當ルモノニシテ無祿ノ有様ト云フモ可
ナリ故ニ人戸多カラザル村ニ於テ不幸ニシテ士族ノ來テ
住居スル者多キハ其村ハ之ガ爲ニ滅亡スルニ至ルモノ

キガ故ニ往々文ヲ善クシ經世ノ道ニ志シテ實際ニ有力ノ
人物ヲ出スハ或ハ日本ノ華族ニ優ル者多カラント云フ、
第二士族、其數甚タ多クシテ定員ヲ詳ニス可ラズ八道到
ル處ニ殆ト士族アラザルハナクシテ京城ニ居ル者最モ多
シ其服飾モ貴族ニ等シク教育交際モ固ヨリ相同シ唯官ニ
就クニ當リ其昇進ノ限ニ至レバ更ニ昇ル可ラザルモノア
リ去年日本ニ來聘シタル李祖淵氏ノ如キハ地方ノ縣令ニ
シテ一時副使ニ任セラレタル者ナレ其身分ハ士族ナリ
ト云ヘバ唯僅ニ長上ノ官ニ昇ルヲ得ザルノミコトナラン
第三中族、士族ニ亞ク者ニシテ貴族士族ト服飾ノ區別ア
リ辨察官ナドハ中族ヨリ出ルト云フ、第四郷族、專ラ地方
ニ多シ日本ニテ云ヘバ昔ノ庄屋名主、今ノ戸長ノ如キハ
此郷族ヨリ出ルノ風ナリ第五常民ト稱ス即チ平民ノ事
ナリ常民ハ他族ニ比シテ其等級ノ下タルヲ甚シ服飾ヲ殊
ニスルハ無論、他ニ對シテハ應對稱呼ノ語ニモ上下ノ別
アリ加之元來朝鮮國ノ刑法甚タ寛ナラザル其中ニ就テ常
民ガ罪ヲ犯シテ其事若シ以上四族ニ關係アルキハ特ニ刑
ヲ重クシテ之ヲ罰スルノ法ナリ常民ノ壓制束縛ヲ蒙ル以
テ知ル可シ又朝鮮ニテハ常民ニ富豪ノ者アルモ其錢穀ヲ
以上四族ニ貸スナ好マズ止ムヲ得ザル場合アルモ様々ニ

アリト云フ
封建時代ノ日本ノ士族モ固ヨリ逸居素餐ナラシカハ
尙兵役ニ當ルノ責アリ然ルニ朝鮮ニ於テ兵ニ役スル
者ハ悉皆常民ニシテ他ノ四族ハ常ニ將校タルヲ法ト
ス即チ京城ニ五方ノ兵アリト云ハ又實際ニ屯營スル
七千七百餘ノ兵士モ皆常民ナリ其不利ナルコトハ日本
ノ農工商ヨリモ甚シキモノト云フ可シ古ヨリ朝鮮人
ノ語言ニ大朝鮮國ノ八道陸ニ二百二十三萬四千七百
ノ兵アリ海兵ノ數亦コレニ同シト云フハ固ヨリ痕跡
モナキコトナレ也或ハ常民ノ兵役ニ當ル可キ壯者ノ數
ヲ計ヘタルモノナラン歟 (以下次號)

朝鮮政變備考 (八月五日ノ續キ)

朝鮮國ノ人民ヲ日本國人ニ比較スレバ身軀壯大ニシテ食
料モ多ク膂力強キガ如シ我輩ハ之ヲ見テ羨マシキコト思
ノ外彼ノ國ノ識者ハ古來所見ヲ殊ニシ其人民ノ武ヲ好ミ
闘ヲ樂シムヲ愛テ其悍強ヲ制スルカ爲ニ專ラ人ヲ文ニ
カントスル方便ノ中ニ最モ著シキモノハ科擧ノ法アリ即
チ國人ノ文ヲ試テ官ヲ授ルノ法ナリ科擧ノ試文ニ六體ア
リ日詩曰賦曰表曰策曰義曰疑是ナリ蓋シ義トハ大學中庸
論語孟子四書ノ義ヲ明カニシ、疑トハ詩經書經禮記三經

ノ疑ヲ解クコトナリト云フ古來科擧ノ法ヲ定ルコト斯ノ如クナルガ故ニ全國學校ノ規則モ家塾ノ教授モ皆コノ風ニ從ハザルモノナシ苟モ家々ノ子弟ガ就學ノ齡ニ達スレハ父兄ノ望ム所モ教師ノ教ル所モ唯科擧ノ文ヲ善クセシメントスルニ熱心シテ餘念アルコトナシ若シモ年長シテ能クセザル者アレハ鄉黨コレヲ笑ヒ、朋友與ニ齒セズ、父母ノ憂嘆、教師ノ失望、際限アルコトナシ或ハ文ヲ能クセスモ武ヲ以テ出身スル者アルモ彼レハ武人ナリトテ世間皆コレヲ賤シムガ故ニ良家ノ子ハ武擧ヲ願ハズ武ニ擧ケラレタル者ハ政府ニ在テ文官ト相對シ其官位互ニ相當スルモ右文左武ノ風盛ニシテ第二流ノ地位ニ居ラサルヲ得ス之ヲ要スルニ朝鮮ハ今日正ニ詩賦文章ノ國ニシテ政府ノ力モ人民ノ力モ悉皆又ニ用ヒテ餘ス所ナシト云フモ可ナラン其政府ニテ心ヲ用ルノ周密ナル一例ヲ擧ケンニ前節ニ云ヘル如ク平安道咸鏡道ノ人ハ他諸道ニ殊ニシテ動モスレハ武ニ趨ルノ風アルヲ以テ政府ハ特ニ之ヲ憂ヒ此二道ニ科擧ノ法ヲ行フニハ通常六體文ノ外ニ特ニ講經ノ法ヲ設ク、講經トハ經書ヲ講スルノ義ニシテ科擧ノ片ニ四書三經ノ本文ヨリ其正註細註ニ至ル迄モ之ヲ誦讀シテ其義ヲ講セシメ一句不通ノモノアルモ落第スルヲ法トス故ニ家

々ノ子弟ハ幼年ノ時ヨリ誦讀ニ精神ヲ費シ父母コレヲ責メ師友コレヲ叱咤シ通夜眠ラズ終日食ハズ其慘刻實ニ名狀ス可ラズシテ往々之ガ爲ニ病ヲ發シテ死スル者多シ斯ル習俗ナルヲ以テ平安道ノ人ハ一家ニ三男兒アレハ其三名中ニ智力最モ多ク体力最モ逞マシカラント認ル者一名ヲ撰テ讀書ニ從事セシメ其餘ノ心身薄弱ナル者ヲハ農ト爲シ商ト爲スト云フ、文ヲ勤ルコト如ク一般ノ風ヲ成シテ苟モ衣食聊カ完キ者アレハ詩ヲ賦シ文ヲ草セザル者ナシ常民社會ニ至ルマデモ同様ニシテ且又科擧ノ法モ五族ノ孰レヲ問ハズ皆コレニ應ズ可シト雖也及第シテ官ヲ授ケラル、ニ至レハ各其族ノ等級ニ相當ス可キ地位ニ用ルノミニシテ如何ナル英才俊秀ニテモ本來ノ族外ニ拔擢セラル、ハ極メテ稀ナリ尙文ノ風盛ナリト雖也未タ以テ門閥ヲ破ルコト足ラザルモノナラン國教ハ儒佛二様ニシテ儒教最モ盛ナリ凡ソ國中三尺ノ童子ト雖也孔子ノ尊キヲ知ラザル者ナシ佛教モ國中ニ廣カラザルコト非ズト雖也大抵下等社會ニ行ハレテ上流ノ士君子ニハ之ヲ顧ルモノナシ蓋シ佛法ノ朝鮮國ニ衰ヘタルハ其年久シ今ヨリ五百年外、前政府王氏ノ時代ニハ王室ヲ始メ上等ノ社會ニテ大ニ佛ヲ信シ佛ニ奉ズルコト厚カリシ

カハ李氏ノ政府ハ廢佛ノ主義ニシテ革命ノ後一時ニ之ヲ擯ケテヨリ全國ノ佛道次第ニ衰微シテ遂ニ回復スルヲ得ズ今日ニテモ國中稀ニ寺院ノ洪大ナル者ナキニ非ザレハ其稀有ノ大伽藍ハ必ズ前政府時代ニ建立シタルモノニシテ五百餘年ノ古跡タルコト過キズ今日ハ唯其敗頽ニ任スルノミスル有様ナルヲ以テ僧侶ノ權力モ甚タ微ニシテ殆ト十君子ト齒スルヲ得ズ唯鯁寡孤獨ノ緣ル所ナキ者ガ出家シテ僧ト爲リ僅ニ下等社會ノ慈善ニ依頼シテ生活スルノミノコトナレバ佛者ニ人物ナキハ固ヨリ自然ノ勢ニシテ我國ノ佛門ニ比スレバ天淵ノ相違ト云フ可シ日本人ヨリ考ヘテ一奇事トモ云フ可キハ朝鮮ノ國法ニ於テ僧侶ヲ兵ニ役スルト云フ此一事ヲ見テモ佛法ノ盛ンナラザルヲ知ル可シ

左議政 金炳國
 事 大司交隣司
 經理堂上 判教李載冕
 從一品 趙寧夏
 掌樂主簿 洪在鼎
 正四品 宋廟令鄭憲時
 軍務司邊政司議訟司
 知中樞 謙鎬
 從一品 尹滋德
 正六品 金用來
 軍資直長 李暉
 從七品 柳協用
 通商司
 京畿監司 金輔鉉
 正一品 禮曹參判 金宏集
 從二品 相禮 柳 瑛
 從三品 龍仁縣令 李祖淵
 正五品 尹泰駿
 副主事 從九品 金炳德
 直提學 閔泳翌
 從二品 李命宰
 從三品 趙忠熙
 正四品 朴永善
 正六品 朴永善
 主事 正一品 趙忠熙
 正四品 朴永善
 正六品 朴永善
 總理機務衙門
 副經理事 趙秉稷
 副經理事 李憲泳
 副經理事 閔種默

○昨日社説欄内末段廿九行目罪スルハ罪ヲ謝スルノ誤脱可シ (以下次号)

○朝鮮外務省職員錄 朝鮮政府總理機務衙門(日本外務省清國の総理衙門に當る)の職員錄を得たれり左に揭ぐ

(明治十四年三月九日講) 修官ヨリ贈ラレシ分) 總理機務衙門職員錄

(明治十五年一月十二日) 差備官ヨリ贈ラレシ分) 總理機務衙門

總理大臣 領議政 李最應 改定職員錄

總理機務衙門
 經理堂上 金輔鉉
 副經理事 李元會
 經理事 金正熙
 經理事 趙義純
 經理事 閔泳翌
 副經理事 李憲泳
 副經理事 閔種默

機械司軍物司船艦司	利用司堂上經理事	閣謙錫
經理堂上	漢城判尹	鄭範朝
正二品	刑曹判書	申正熙
正二品	主事	朴定陽
正六品	副主事	金炳德
從九品	典選司	李根弼
從九品	檢書官	韓龍源
從九品	典選司堂上經理事	金炳德
正二品	經理事	尹滋德
正二品	知敦寧	致序
正二品	經理事	趙準永
正五品	主事	任慶準
正六品	內資奉事	李重夏
正八品	副主事	李濟馬
守門將	參謀官	李東仁
別遣軍官	參事	李東仁
正七品	從一品	金景運
從一品	從一品	李應圭
正三品	正三品	李應圭
監工司堂上經理事	閣台錫	嚴世永
經理事	鄭範朝	姜文馨
副經理事	姜文馨	

○朝鮮事變日誌 花房公使一同万死の中一一生を全
ふし去月卅日朝鮮京城が長崎迄歸着せられたる陸軍
歩兵大尉水野勝毅、同中尉初岡利治、同軍曹千原秀太
郎等の諸君、此事變の顛末上申の爲め上京すると
あり去る三日神戸着港一昨日無事東京に歸着せられ
るを以て我公使以下苦戦の形状を審みよるを得

は未だ其動靜を審みすべからず山上の八喧鬧石を投
する者あり於是館内稍や守を嚴み而して館に前後
朝鮮人の來り集ると倍々加へり前面城壁れ上下も亦
人あふさるとおかし其數幾千八百あるを知らせ公館雇の
朝鮮人皆逃れ去て一人を留めを時に午後五時半頃門
前忽ち一喊聲を發せ山上山下齊しく之に應じ石を飛
ひす霰の如し羽箭亦多く飛來る勢ひ前後の門を奪て
闖入せんと欲するが如し陸軍大尉水野勝毅二等警部
岡兵一館員及び巡查を指揮し要處を守禦し特は前門
を開け其闖入を待て鑿殺せんと欲し蕭然相待つと雖
ども敢て入るものおかし時に亂民中火を放て火を放て
と呼ぶもの有り須臾にして火を館後の一民家に放ち
續て伴接官出張所の門廡を燒き又館右差備官の詰所
を燒く餘焰延て館舎よ及いんとす七等馬山顯藏一
等巡查小林志津三郎短銃を以て放火者を狙撃し數人
を斃す依之賊稍躊躇すと雖も合圍益々密に銃を放ち
箭を飛ばし石を抛ち火を投去毫も退縮せ勢おく咆哮
の聲市街山野も充滿せり當初館員皆以爲らく亂民多
勢ありと雖ども敢て館内を闖入するものなし暫らく
支へて時を經ば朝鮮政府必は兵隊を出し之を鎮壓す
へしと故に各努力相防ぎ延て夜半よ及ふと雖も政府
敢て一兵を出さず而して賊吹角喊聲相應え勢益激し
四隣の民家悉く火とかり炎焰既に官舎よ及ひ矢石銃
丸皆公堂を集り其火を被らざるもの獨り公堂及び清
遠閣(接遇所)あるのみ茲よ於て館員皆公堂を會し公
使の令を待つ水野大尉曰く事既に迫り從容死を茲
に待り或一方に突出て運を試むるの二に過ぎ

たり然るに同君等が筆記の朝鮮事變日誌を神戸新報
に記載し得るを以て取敢つ先づ之を左に掲ぐ

朝鮮事變日誌

明治十五年七月廿三日午後三時訓練下都監領官の使
來て下都監は朝鮮政府日本式兵操練の場所にして
堀本中尉も之を寓せり領官日本式兵士官あり一
書を差出す之を披見するに亂民黨を伴し今兵隊と相
闘へ日本諸公を干犯せんと欲するは意あるを似
り若し公館を侵襲するはらば放銃揮劍自防の計を煩
す云々之れに續て公使館雇の朝鮮人外を歸り來り告
て曰く今亂民數百大闕を犯し又閣台錫閣謙錫(王妃
の戚黨)の邸を襲ひ家屋を毀壞せりと又下都監寄寓
の我陸軍語學生岡内啓池田平之進及び私費語學生黒
澤盛信れ三名公館を來らんと欲して途中南大門の邊
に於て暴徒れ爲め毆打せられたりと其率る所の小
童走來りて之を報す因て先づ之を護衛せしむる爲先
二等巡查川上堅輔同池田爲善三等巡查本田親友を派
す引續き差備官より奇變忽ち起れり公使以下皆速か
く後山に逃げよと告げ又差備官李承漢特に來りて之
を促せよ故に答ふるは若し亂民ありて我公館を犯さ
んと欲せば政府宜しく兵を派して護衛せらるへし速
に此意を京畿觀察使に告げよ李承漢諾し歸り去る此
時館後の丘山よ朝鮮人の來集する者頗多く門前往來
常から依て陸軍軍曹千原秀三郎二等巡查宮周太郎
を後山に登らせめ其景況を視察せしむ須臾にして歸
り報して云ふ只京畿觀察使近傍慶氣滿空城内の如く

走願くは公使早く之を決せよ御雇水島義及小林等巨
く突出して後山よ登り間道よ揚華津よ出る難きよ
非らず岡警部曰後山路險峻衆齊進する能はず矢石の
爲に徒死するのみ不如正門を突出し死人の山を築き
死を潔ふせんには公使令して曰く諸説未だ盡さ
る處有り須らく正門より出く先づ大路を經て京畿觀
察使の營に到り守護を乞ふへし若し觀察使おして守
護する能とされば須く王宮に赴き國王と安危を共に
すへし辱を山野よ暴す勿と衆皆之に服は而して正門
外大路賊蟻集之を經過する甚だ難し衆必死を決し隊
列を整へ番号を定め現員惣數二十八名(館員松岡中
尉御用係杉村清同久水三郎御雇高藤謙三及陸軍語學
生武田甚太郎の五名本日居留)取締の爲め濟物浦に
赴けよ故に此數よ與らせ且先刻陸軍生徒を遣へしめ
ざる巡查三名終り歸り來らせ堀本中尉及び生徒三
名の生死終り知るに由なき一岡、淺山先驅り千原、
水島殿たり時よ夜十二時火を公堂よ放ち國旗を翻し
各揮劍呐喊して正門より突出を賊萎靡四散門前より
大路よ至るの間路甚だ狭し賊豫め柵を結び我進撃に
備へし我其不意よ出つるを以て狼狽逃走自ら其柵
を顛倒し且路狭く人多く猝かよ退く能はず我衆進ん
て之を斫る大凡二十余名終り一條の血路を開き大路
よ出つ賊畏縮敢く近かず只遠に在て瓦礫を擲つるに
於是更に整列點呼するに獨り佐川晃左腿に小傷を受
けたるのみ夫より徐歩して觀察使の營よ至れり小門開
けり入て大門内よ及へば四五輩門に樓上よ在て瓦を
擲つる短銃を放て之を追ひ又一人を斫る餘皆逃匿

を稽進て三門を過ぎ宣化堂に(觀察使の正堂)至る寂として入るし察するに觀察使も亦王宮小入侍せえちらん故も足を控は止先を再び大路より南大門に至り扉と敲き門將を呼へども答へを鉄扉重外より開くに由あし公使云く我分是に至つて盡きたり寧ろ此地に在る再び襲撃を受けんより須く楊華津に至り後圖を議すへしとはより路を轉して楊華津に至る時降雨衣帽皆濡ふ道路暗黒屢蔽路に迷ふ回顧れば遙く火光天を衝くを見る是我公館の焔燒するあり二十四日未明楊華津に至る暫該鎮を據り京城の消息を聞くと欲す該鎮微弱頼む不足らる依て再び避て仁川に赴かんとせし書を裁し鎮將に托し同文司經理事并ハ京畿觀察使に寄す其大意は前日來の形勢大略を述へ政府の派兵保護するを待てども一兵來らば王宮を赴のんとせよとも南大門開かせ已むを得避けて仁川府に赴くんとは只望む貴政府速に亂民を鎮壓せるの計をせよを是より渡口に臨み揮手を促せども來るものあし因て舟を奪ひ自ら渡る(淺山橋を搦り)前夜より降雨淋漓是に至て雷鳴暴雨車軸を流すが如し泥路滑々誤て迂徑より走り衆疲勞甚去午前十時頃富平の成谷里に至り一民家に入り小憩し麥を炊て飢に充て再び雨を衝て程お上り午後三時仁川府に着せり府使鄭志銘出迎へ(差備官高永喜居留地取調の爲め昨日此地より出張せり故に同じく出て迎ふ)自ら政堂を開公使休憩所となし別門前より於く一官舎を掃ひ護衛巡査の休憩に充て自ら新衣を取て公使に呈と周旋懇

待を極光り仁川府京畿防禦使を兼ね護衛自ら其兵あり且つ府使厚遇如此を見て衆稍安堵濡衣を脱して之を乾かし疲憊を醫せんが爲も横臥不覺睡も就くものあり時已も五時に及むんとし忽ち聞く門前騒然二等巡査遠矢庄八郎身僅も襦袢を着く徒跣刀を提げ來る之を見れば滿身血も染めり續て二等巡査五十嵐惠吉も亦徒跣踰として刀を杖て來る全身血を迸らるも三等巡査横山貞夫亦創を負ふも雖も猶能來り門を閉ちて之を守る皆曰く賊徒我不意を窺ひ門前の休憩處を襲撃し矢雨注刀鎗亂刺一等巡査廣戸昌克二等巡査宮周太郎等數名之に死す請ふ速も備へよ衆相呼で互に警め起て裝を理む忽ち聞銃聲堂後に發し矢石雨の如く下る之を熟視すれば賊堂後の牆壁に集り中銃を取て狙撃するもの六七人銃丸室内に徹す小林淺山先起ち短銃を放て之を防ぐ飛丸淺山の右股を傷く於是府兵皆賊を合せるを知る衆皆云く勢ひ危も至る坐して彼の狙撃を受けんより寧ろ門前を突出して奮戰以て死を致の快きに如のすと公使を中に擁し刀を揮ひ呐喊して出づ府兵三四十人槍を擧げ肩尖刀を横へ門前に屯り淺山先づ短銃二發を放ち水野大尉千原軍曹等踊躍奮進府兵皆逃奔す衆皆活路を意表に得たり終に疾走趨過して濟物浦の路に上る賊花房公使と叫ひり石を投ぎ肩尖刀を揮ひ來る岡警部殿して追撃を防ぐ甚た危し小林一等巡査返戰之を救ふ短銃を放つ數發追兵遠趨踏踏を初め衆皆慮る濟物浦に到るの間山を沿ひ溪を跨り道路迂迴若彼を伏兵の設あむ

バ一人存するを得ず此時忽ち見る前頭久水三郎高雄謙造馬を飛して來る(久水等濟物浦にあり公使は仁川に着するや岡警部書を飛して京城の變を報せ故を以て來り候する也松岡中尉杉村濬武田甚太郎亦來會そ於是道路埋伏の兵あきを審かにす衆少しく安意久水騎る所の馬を私費語學生徒楓玄哲も與へ先づ馳て濟物浦に至り舟を準備せしむ高尾馬を公使も進む公使淺山を顧み云く子傷けり先馬も馳せ淺山云く僕請ふ後鞍も乗じ公使を護せん即ち同じく跨て去る此時後山より銃聲あり不中一先濟物浦に着同浦土人を要し小舟に駕し月尾島に渡り大船の航海に堪ゆるものを擇ぶ松岡杉村淺山等之に従ふ近藤書記官水野大尉其他負傷者に至るまで十八名後を到る既も公使の舟も駕し去るを聞き又一艇を僦わんと欲す村人命に應ずる者あし終に沙上もある一船を奪ひ力らる極めて波上も押し月尾島も渡らんとは(濟物浦を距る八町餘)潮流箭の如く楫櫓不備船旋轉して不進衆亦手浪を掻き僅も月尾島も達するを得ざり當も嶋人を呼び強雇せんとす恰好し公使出る所の迎船跡を尋て來り幸に一般に會合するを得たり此日仁川に於て戰死する者一等巡査廣戸昌克二等巡査宮周太郎御雇水嶋義私費語學生近藤道堅生死未詳者鈴木金太郎飯塚玉吉負傷者七等屬淺山顯三御用係會庸輔二等巡査遠矢庄八郎同五十嵐兼吉三等巡査横山貞夫あり但し仁川府に在るや外國火輪艦の南陽灣に碇泊するを確聞す依て先づ該艦の所在を探り若之を探り得ざれば豊嶋も據て後圖を定むべしとあし廿五日朝揚帆先南陽灣

は向ふ風逆にして船進まず廿六日漸霧太た深し朝陽の昇るも至て天僅も晴る遙に三桅檣船を前洋も望む上下雀躍先づ國旗を竿頭も掲げ(京城より護り來る所の國旗也)目標とあむ午後三時船近づくも及んで船長日本國旗を認め小汽船を出し之を迎ふ本船も移れば即ち英國測量船飛魚號も船長以下皆我善知る所の人なり但本艦船する所を(汾溜島)と稱し濟物浦を距る十五海里本日艦長艦を他も移さんと欲して霧の爲に不果爲に我舟と是も會するを得ると云我微運の不盡愛に到る真も天幸と云へし於此公使朝鮮國王殿下に呈する書(難を避けて此に到るの事由を畧述し近日再度の難を告ぐ)及同文司觀察使に寄せるの書(死者を格別埋葬及生死未審のものもを救護する等のことを述べ)及堀本中尉に贈る一書を作と水野大尉も亦一書を添へ雇ひ來れる舟主に托し之を觀察營に轉送せしむ此夕第十時艦錨を抜き長崎に向て回航す記於是止

京城公使館を突出する總員廿八名
辦理公使花房義實、書記官近藤真鋤、陸軍歩兵大尉水野勝毅、海軍中軍醫佐川晃、(負傷於京城)外務四等屬石橋貞、同一等警部岡兵一、全七等屬淺山顯三、陸軍歩兵軍曹千原秀三郎、外務御用掛大庭永成、同會庸輔(負傷於仁川)一等巡査小林志津三郎、同廣戸昌克(戰死於仁川)同一等巡査遠矢庄八郎(負傷於仁川)同五十嵐惠吉(負傷於仁川)同宮周太郎(戰死於仁川)同三等巡査横山貞夫(負傷於仁川)公使館雇水島義(戰死於仁川)同川上立一郎、海軍看病夫長介鈴木利作、公

使館員鈴木金太郎(生死不詳)同中村卯作、同飯塚玉吉(生死未詳)私費語學生近藤道堅(戰死於仁川)同堀玄哲、同堀口將一郎、公使從者今西美成、書記官從者宇野助右衛門、水野大尉從者與山錫、○濟物浦居留地取調の爲出張八員五名、陸軍歩兵中尉松岡利治、外務御用係杉村澹、同久水三郎、陸軍語學生武田甚太郎、公使館雇高嶺謙三、總計三十六名、内戰死四名、生死未詳者五名、殘現在員二十七名、外に在下都監人員陸軍工兵中尉堀本禮造、陸軍語學生岡内格、同池田平之進、私費語學生黒澤盛信、陸軍語學生護迎の爲出張外務二等巡査川上堅輔、同池田爲善、同三等巡査本田親久(以上七名戰死)

朝鮮政略備考(前号ノ續キ)

朝鮮國ノ政体ハ素ヨリ君主專制ニシテ大臣公卿如何ナル佳猷ヲ案シテ之ヲ建白スルモ君主聽カサレバ施行スル能ハズ君惡政ヲ行フテ臣下コレヲ諫ルモ君用ヒサレバ又如何トモスルナシ唯間接ニモ君主ノ舉動ヲ制スルモノハ數百年來朝鮮ノ全面ヲ支配スル古習舊慣ノ力アルノミ其官吏組織ノ大概ヲ舉レバ國王ノ下ニ在テ政府最上ノ位ニ立ツ者ヲ領議政ト云フ日本ニテ云ヘバ太政大臣ナリ次ニ左議政右議政アリ即チ左右大臣ナリ次ニ左右贊成左右參贊各二人合シテ四名アリ之ヲ輔國太夫ト云フ次ハ則チ

ヲ命スルモノニシテ四者各獨立スルモノト知ル可シ一州ノ長官ヲ牧使ト云ヒ一府ノ長官ヲ府使ト云フ郡ハ郡守ニシテ縣ハ縣令ナリ或ハ之ヲ縣監トモ云フ地方長官ノ次ニ位スル者ヲ座首ト云フ必ス其地ノ鄉族ヲ用ヒ其他ノ小吏員ハ皆常民ヨリ擧ケラル、者ナリ常民モ官ノ吏員ト爲リテ三世相續スルハ郷族又ハ中族ノ籍ニ入ルコトアリ又朝鮮國租稅ノ法ハ曖昧ナルモノ甚タ多シ成規ニ於テハ五族ノ論ナシ田土ヲ有スル者ハ皆稅ヲ納ルノ法ニシテ或ハ穀物或ハ穀代何レモ納稅者ノ隨意ニシテ其稅額ノ名ハ甚タ寛ナルガ如シト雖モ地方官吏ノ私ヲ働クコト甚タ隨意ニシテ結局小民ノ頭上ニ課スルモノハ甚タ重キノ實アリ此納稅ノ一事ニ就テモ常民以上ノ四族ハ自カラ官吏私曲ノ働ヲ免カレテ失フ所少ナシ又田租ノ外ニ布ナルモノアリ每布ヲ織テ納ルノ舊慣ヲ變ジテ今ハ錢ヲ以テ之ニ代ヘ布ハ唯名ニ存スルノミ是レモ全國ノ每布必ズ免カル可ラザルノ成規ナレモ戶籍法サヘ不分明ナレバ其間ニ在テ官吏ノ私スルハ甚タ容易ナリ其不公平ナル一例ヲ舉レバ戶布ハ朝鮮國中ノ每布ト云フ成規ニシテ京城幾万ノ戶數ニハ之ヲ課セズ蓋シ京城ニハ有力家ノ住居スル者多キガ故ナリ譬ヘバ日本ノ封建時代ニ日本國中ノ武家屋敷ニ

六曹判書ナリ曹トハ日本ノ省ノ如キモノニシテ吏兵戶禮工刑ノ六ニ分チ吏曹ハ官吏ノ進退黜陟ヲ司リ兵曹ハ兵馬ノ事ヲ司リ戶曹ハ戶籍錢穀ノ事ヲ司リ禮曹ハ禮式祭典等ノ事ヲ司リ前年ハ外務ヲモ禮曹ニテ取扱ヒシト云フ工曹ハ建築營繕ノ事ヲ司リ刑曹ハ則チ司法官ナリ各曹ニ長官一名アリ即チ判書ニシテ我國各省ノ卿ノ如シ判書ノ次ニ參判アリ我大輔ノ如シ但シ判書以上ハ必ズ貴族ニ限ルノ法ナレモ參判ハ士族ニテ之ニ任スル者モアリ參判ノ次ハ參議、次ハ正郎、次ハ佐郎等屬官百司各其職掌アルコト稍ヤ日本ノ制度ニ似タル所モアリ

在昔ハ京城ニ五營ヲ設ケテ兵員五万ト稱ス今ハ之ヲ二營ニ分チ七千七百ノ兵ハ現ニ之ニ屯スト云フ各道ニモ兵營ヲ置キ節度使ヲ遣テ之ヲ管轄セシム前ニ記ス如ク兵士ハ悉皆常民ヨリ取リ其兵制軍器共ニ見ル可キモノナシ八道ニ各方伯一名アリ之ヲ觀察使ト云フ文武ノ權ヲ兼ヌ其次ニ都事一名裨將六名アリ都事ハ文官ニシテ中央政府ヨリ之ヲ命シ裨將ハ觀察使ノ命スル所ニシテ武官ナリ地方ヲ分テ州府郡縣ト爲ス但シ州中ニ府アリ府中ニ郡アリノ組織ニ非ズ唯地方人口ノ多寡ニ從テ之ヲ區分シテ名

リ地稅ヲ納メタルコトナキト同様ノ譯ケナラン右ノ如ク地方ノ官吏又ハ様々ノ俗吏輩ガ政府ト人民トノ間ニ居テ奸曲ヲ働クハ惡ム可キガ如クナレモ我輩ノ所見ニテハ必ズシモ此官吏ヲ視テ惡人ト認ルヲ得ズ元來朝鮮官吏ノ俸給ハ極メテ薄クシテ其公然タル成規ノ如ク俸給ノミヲ取領シテハ逆モ家産ヲ立ルニ足ラズ故ニ其奸曲ト云ヒ賄賂ト云フガ如キハ恰モ表向ノ給料ニ當ルモノニシテ所謂御大法ノ許ス所ノモノナラン我徳川政府ノ時代ニテモ一年ノ祿米三十俵カ五十俵ノ小吏ガ相應ニ家産ヲ立テ、安樂ニ妻子ヲ養ヒ時トシテハ幾千百ノ資金ヲ貯蓄シタル者モアリ町方ノ輿力同心地方ノ代官手代等ノ如キ是ナリ何レモ皆役徳ヨリ生ズルモノニシテ其役徳ナルモノヲ分折解剖シテ之ヲ吟味スレバ悉皆奸曲ナラザルハナシ又賄賂ナラザルハナシト雖モ徳川ノ小吏必ズシモ悉皆惡人ナラザルガ如シ左レハ朝鮮政府ノ財政如何ンテ論ズルニハ政府ノ筋ニ奸吏多シト云フヨリモ其紀律不取締ニシテ吏人ニ私スル者多ク事實ニ私セザル可ラザルノ事情モアリ又故サテ私セント欲スレバ私スルニ容易ナルモノナリト評シテ可ナラン

大院君ノ政畧

(以下次号)

我輩が昨日ノ紙上ニ記シタル如ク目下朝鮮ノ事件ニ付キ和戰ノ決スル所ハ我レニ在ラズシテ彼レニ在リ我レハ唯我が滿昆ヲ求ルノミニシテ彼レヨク之ニ應スレバ平和ノ局ヲ結フ可シ否レハ則チ戰端ヲ開ク可シ故ニ今日ニ在テ彼レノ政略何レニ出ツ可キヤチ推測スルハ大切ナル事ト信ス去月二十三日以後彼ノ政權ハ全ク大院君ノ手ニ在ルモノトスレバ君ノ履歴ハ今日大ニ朝鮮ノ政略ニ關スル一固ヨリ論ヲ俟タズ我輩ガ會テ聞ク所ニ據レバ大院君ハ彼ノ國ニ在テ地位ノ高貴ナルノミナラズ其天資剛強コシテ爲スアルノ人物タルハ唯其名聲ニ存スルニ非ズ現ニ爲スアルノ資ニシテ事ヲ爲シタル人物ナリ今ヲ去ル一十九年攝政ノ職ニ任シテヨリ政府ノ萬機ヲ一手ニ執テ意ノ如クナラザルハナシ從ハハ赦シ從ハハ殺スノ一主義コシテ全國ヲ威伏シ貴族以下ノ跋扈ヲ制シテ王室ノ尊榮ヲ耀カス等美譽モ亦少ナカラズ就中外國ノ人ナ思ミ外國ノ事ヲ惡テ其跡ヲ國中ニ絶トントスルハ畢生ノ心事コシテ尙モ急漫シタル一ナシ是レヨリ先キニ佛蘭西ノ天主教師ハ支那ノ陸地ヨリ朝鮮ノ内地ニ入テ漸ク教化スルモノアリ大院君ノ之ヲ惡ムト甚シ、乃チ大ニ天主教追捕ノ嚴令ヲ下シテ凡ソ國中ノ人民外教ヲ信スル者ハ男女老幼ノ

別ナク皆コレヲ捕縛シテ死刑ニ處シ其三族ヲ夷シテ遺類アルヲナシ朝鮮國ニテ天主教ノ信徒ハ事實ニ於テ其數甚タ多カラスト雖モ其罪ノ疑ハシキ者ヲ殺シ又其親族ヲモ斃スノ法ナルガ故ニ之ガ爲ニ命ヲ落シタル者ハ殆ト數ヲ知ル可ラズ慶應ノ末年明治ノ初年ハ正ニ其刑戮ノ時節ニシテ毎日刑場ニ於テ斷首セラル、モノ百名ニ下タルヲナカリシト云フ
此時ニ際シテ日本ハ王政維新ノ事ヲ行ヒ恰モ西洋風ノ新日本國ヲ出現シテ爾來屢朝鮮國ト掛合テ始メ次第ニ葛藤ヲ生シテ明治六年ニハ日本ノ政府ニ征韓論ノ起ル程ノ次第ナレバ彼ノ國ニ於テモ日本人ノ舉動ニ注意シテ怠ラズ熟ラ其様ヲ視察スルニ新日本ノ士民ハ西洋天主教國ノ風ニ心醉シテ洋鬼ニ嗜着セテレ恰モ一葦水ヲ隔テ、一區ノ洋鬼國ヲ生シタルモノナレバ之ヲ洋夷ト視做シテ攘ハザル可ラストテ專ラ攘和ノ政略ニ忙ハシク様々ニ策ヲ施ス其中ニ就テ最モ著シキモノハ慶應ノ末年國中ニ令ラ下タシテ京城及ヒ各州郡ノ市場等行人ノ往來繁キ地ヲ撰テ必ス石碑ヲ建テ其碑面ニ洋夷侵犯、非戰則和、主和賣國ノ十二字ヲ刻マシム其碑ノ數、千ヲ以テ計フ明治四年漸ク國中ニ周テクノ大ニ攘夷ノ氣風ヲ振起シ又同時ニ國中ノ墨

工ニ命シテ墨ヲ制スルニ必ス右ノ十二字ヲ印セシメ若シモ此印字ナキ墨ヲ賣ル者ハ罪ニ處スルノ法ヲ設ケタルガ如キハ攘夷ノ注意周密ナリト云フ可シ明治六年君ガ政權返上ノ後モ其主義嘗テ動ガズ或ハ改進黨流ノ顯官等ガ開國ノ利ヲ語ルトモアレハ君ハ必ス辭色ヲ變シ尙モ朝鮮國中ニ居テ改進黨國ヲ利トスル者アラハ先ツ國中洋夷侵犯ノ石碑ヲ倒シテ然後ニ之ヲ語レト唯一言ノ下ニ之ヲ擯斥シテ再ヒ其人ヲ見ズト云フ
又大院君ノ爲人ハ純然タル專制主義ナシ朝野有力ノ人物ニシテ其爪牙股肱タル者甚タ多クシテ計畧ノ陰密ニシテ發シテ活潑ナルハ往々人ノ耳目ヲ驚カスモノアリ蓋シテ專制獨斷ノ人ニシテ孤立スル者ニハ非サルナリ其機密ヲ重ニスルノ一證ヲ舉レハ君ガ執權ノ一家ニ在テ座右ニ使役スル給事コハ常ニ二三ノ啞子ヲ撰テ之ヲ用ヒタリト云フ給事ニ啞子ハ最モ不便利ナル可キカ如クニ思ハレモ平生ヨク之ニ教ヘテ筆硯茶菓酒肴等友人ノ用談懇會ニ要用ナルモノヲ呼フコハ目ヲ以テシ手ヲ以テスレハ目カラ之ヲ便シタルヲナラン密談ニ他ノ探偵ヲ防クノ新工風ニ亦以テ君ガ用心ノ深遠ニ凡ナラサルヲ知ル可シ
以上記ス所ヲ以テスレハ大院君ノ主義ト其爲人ノ大概ハ

窺見ル可シ決シテ平凡ノ人物ニ非ス、此資力ヲ以テ廣ク國中ノ有力者ニ結ヒ却テ其身ハ政治ノ外ニ棄テラレタルノ姿ナリ國勢ノ危キヲ智者ヲ俟タズシテ明ナリ左レハ今回ノ事變ハ其由テ來ルヤ久シクシテ深シ決シテ偶然ニ非サルナリ
大院君ノ政略(昨日ノ續キ)
今日マダノ報道ニ從ハバ今回大院君ハ兵士ノ不平ヲ利用シテ事ヲ舉ケタルモノニシテ其舉動最モ活潑ニシテ其成功最モ速ナリ一朝ノ運動ヲ以テ之ヲ私ニシテ十年ノ宿怨ヲ報シ之ヲ公コシテハ以前ノ政權ヲ回復シタリ之ヲ評シテ東洋ノ好雄ト云テ可ナラン然ルニ此好雄ガ朝鮮國ノ政權ヲ一手ニ掌握シテ愉快ハ則チ愉快ナラント雖モ今後ノ政略ニ就テ果シテ所見アルヤ否、我輩ハ君ノ爲ニ大ニ憂ヘザルヲ得ス君ガ政略ノ骨髄ハ孔子ノ道ヲ尊テ外人ヲ斥攘スルノ二者アルノミニシテ今日ハ既ニ國母弑殺ノ名ヲ得タリ孔子ノ道ニ對シテ弱點ヲ現ハシタルモノト云フ可シ是レハ內國ノ事ナレハ如何様ニモ名ヲ作テ國民ヲ瞞着シ得ヘシトスルモ外人ヲ斥攘スルノ一事ニ至テハ殆ト其策ニ窮スルヲナラン多年國中ノ人心ヲ養成シテ斥和ノ主義ヲ固クシタル朝鮮國ニ向テ其無禮殘虐ノ罪ヲ問フ者



誰ソヤト尋レハ一新洋鬼國タル日本政府ナリ此日本政

府ノ要求ニ應テ自國ノ罪ヲ謝シ其罪人ヲ捕縛シテ嚴刑ニ處シ其國財ヲ出テ償金ヲ拂ヒ永世日韓兩國ノ交際ヲ厚クシテ毫モ二心ナキノ證ヲ表セントスルハ固ヨリ大院君ノ身ニ行フ可キ事ニ非ス又口ニ發ス可キ言ニ非ス即チ其政略ノ骨髄ヲ失フモノナレハ復タ大院君ナシト云フモ可ナリ況ヤ其罪人ヲ捕縛シテ刑ニ處スルガ如キハ今日ノ大院君ニシテ昨日ノ爪牙股肱ヲ殺ストナレハ股肱先ツ亡ヒテ身幹孤立ス遂ニ又共ニ亡ヒンノミ、過般ノ報道ニ據レハ君ハ彼ノ白樂寬ノ縲纒ヲ解テ之ニ大將ノ印綬ヲ授ケタリト云フ即チ大院君ノ大院君タル所以ナレト云フ、日本ヨリ問罪ト聞テ俄ニ慌惶シ此白樂寬ノ一類ヲ指斥シ又其人ノ罪ニ從テ之ヲ刑ニ處ス可キヤ至難ノ事ト云フ可シ或ハ大院君ノ奸雄ヲシテ眞ニ大奸豪雄ナラシメ忽然其心事ヲ翻カヘシテ天下ノ意表ニ出テ昨非今是人事ノ常ナリ今吾ハ故吾ニ非ス吾レハ改進黨國ノ主義ニ變シタルモノナリ苟モ今吾ノ主義ニ從フ者ハ之ヲ赦サン從ハサル者ハ則チ殺サントテ大膽不敵ニモ改メテ開國ノ主領ヲラン歟我輩大院君ノ膽力ヲ評價シテ其働ノヨク此點ニマテ至ル可シトハ信スルヲ得ス君モ亦是レ朝鮮國ノ一學士ニシ

實ヲ以テ曖昧模糊ノ間ニ人心ヲ瞞着シテ一時内國ノ難ヲ免カレ願テ日本ニ向テハ温言以テ罪ヲ謝シ平和ノ外面ヲ裝フノ計畧ヲ運テスナラシ我輩ガ臆測ヲ以テスレハ頑固翁ノ策ハ大抵コノ邊ニ出ルナラシト信スルノヨシ翁ノ計畧此ニ出ルモ我日本ヨリ要求ノ箇條ヲ提出シテ遠ニ之ニ應ス可ラサルハ必然ノ勢ニシテ其間ニハ言ヲ左右

ニ寄セテ其罪ヲ輕クセントシ其期限ヲ長クセントシ今日ハ斯クト答ヘテ明日ハ又其レト變シ甚シキハ主任者ガ病氣ト詐リ又ハ日ノ吉凶ヲトスルガ爲ニ談判ヲ延期スル等ノ奇談モアル可シ何レニモ堪ヘ難キ次第ニ立至ルハ今ヨリ豫メ期ス可キヲナレハ我レヨリ談判ヲ開キ其返答次第ニテ兎ニ角ニ釜山若シクハ江華島其外何レニテモ要衝ノ地ヲ占據シテ談判ノ抵當ト爲シ速ニ局ヲ結フヲ緊要ナル可シ要價ノ談判ニ兵ヲ用ヒテ抵當ヲ取ルハ誠ニ通常ノ事ニシテ怪ム可キニ非ス既ニ前年生麥ノ事變ニ關シテ英國ノ軍艦カ鹿兒島灣ニ闖入シタルトモ未タ談判ヲモ開カサル前ニ當時島津家ニ屬スル軍用船二隻ヲ軍艦ニテ取押ヘタルヲアリ是亦抵當ノ積リナラシ談判ヲ開カスシテ先ツ抵當ヲ取ルハ無法ナレト今回苟モ我罪使カ朝

テ六十三齡ノ頑固翁ノミ、據ル所ハ孔子ノ道ニシテ守ル所ハ國體論ニ過キス區々タル井底ノ管見ニ安シテ世界萬國ニ文明アルヲ解セサル者ガ一朝誤テ已カ安居タル井底ヲ離レ直ニ日本人ニ接シテ其文武ノ實況ヲ目撃シ更ニ歐洲文明諸國ノ關係ヲ知り得タラハ膽破レ眼眩シテ爲ス所ヲ知ラズ俗ニ所謂薩撻慶ヲ引出シテ公衆ニ直接セシムルモノニシテ其狼狽想見ル可キノミ聞ク所ニ據レハ支那人モ今回ノ事ニ付テハ大ニ周旋スルノ意アルガ如シ既ニ支那政府ノ吏人ハ現ニ朝鮮ノ京城ニ在リト云フ此吏人ハ今回ノ事ニ付テ特ニ派遣セラレタル者歟或ハ其前米英等ノ締盟ニ關シテ在留シタル者歟孰ル可ラスト雖モ支那ノ政府ガ朝鮮ヲ以テ屬國ト認ルノ妄想ハ決シテ消散セサルモノナレバ何レニモ日韓ノ間ニ立入テ周旋ヲ試ルコトナラシ即チ韓廷ヲシテ一應ノ罪ヲ謝セシムルノ策ヲ定ルコトナラシ此周旋ハ固ヨリ我日本ノ容レサル所ナリト雖モ大院君ノ爲ニハ聊カ便利ナキニ非ズ其次第ハ君ハ支那ノ名義ヲ利シテ國民鎮撫ノ方便ニ用ヒ己ガ主義ハ素ヨリ攘和ノ一點ニ在テ謝罪ノ念ナシト雖モ如何セン上國(支那)ノ尊稱(ノ周旋)モアリ又コレヲ無下ニ拒絶ス可ラヌ云々ノ口

鮮國ニ至リ一應談判ノ上彼レヨリ我要求ニ應スルノ實証ヲ呈セザルニ於テハ速ニ抵當ヲ取ルモ妨ケアルコトナシ昔年ノ英艦ニ比スレバ十分ノ寛大ト云フ可シ況ヤ朝鮮人ノ緩漫ナルハ多年ノ事實ニ於テ吾人ノ口ク知ル所ナレハ無抵當ノ談判ハ到底行ハレサルコト信スルナリ

史官官職 伊東東涯三韓紀略内

- 宗親府 宗室諸君之府、宗親無定數
- 大君 王子嫡 君 王子庶 君 自一品至從 都心
- 王 副心 守 典儀 副守 令 典簿
- 副令 監
- 議政府 總百官、平度政、理陰陽、經邦國
- 領議政 左議政 右議政 各三人
- 左右贊成 左右參贊 各一人
- 檢詳二人 司錄二人
- 忠勤府 諸功臣之府、無定數
- 府院君 親功臣、王妃、父君、三弟、經恩二人

漢城府 掌京都

判平 判右平 庶平 判官 參軍

司憲府 掌論執時政糾察百官

大司憲 執憲 掌令 持平 監察 二十四人

開城府 掌治回部

知府 經歷 都事 教授

○承政院 掌出納王命 都承旨 左右承旨 左右副承旨 同副承旨 注書

○掌隸院 掌奴隸簿籍及決訟之事 判決事 司議 司評

○司諫院 掌諫諍論駁 大司諫 司諫 獻納 正言

○經筵 掌講讀論思之任 以他官兼領事 知事 同知事 參贊官 侍講官 侍讀官 檢討官 司經 說經 典經

○弘文館 掌曹府經籍治文翰備顧問 領事 大提學 提學 副提學 直提學 典翰 應教 副應教 校理 副校理 修撰 副修撰 博士 著作 正字

○藝文館 掌制撰辭令 領事 大提學 提學 直提學 應教 奉教 待教 檢閱

○成均館 掌儒學教誨之任

○尙瑞院 掌璽寶符牌節鉞

○春秋館 掌記時政以他官兼

○承文院 掌事大交隣文書

○通禮院 掌禮儀

○奉常寺 掌祭祀

○宗簿寺 掌撰錄塔源譜牒糾察宗室創進之任

○校書館 掌印頒經籍及番稅印篆之任

○司饔院 掌供御膳及闕內供饋等事

○內醫院 掌和御藥

○尙衣院 掌供御衣櫛及內府財貨金寶等物

○司僕寺 掌與馬廐牧

○軍器寺 掌造兵器

○內資寺 掌內供米麵酒醬油蜜蔬果內宴織造等事

○內膳寺 掌各官各殿供上二品以上酒及倭野人供饋織造等事

○禮賓寺 掌賓客宴享宗宰供饋等事

○司膳寺 掌造楮貨及外居奴婢貢賦等事

○軍資監 掌軍需儲積

○濟用監 掌進獻布人參賜與衣服及沙羅綾段布貨 絳色染織造等事

○繕工監 掌土木營繕

○掌樂院 掌教閱聲律

○觀象監 掌天文地理曆數占算測候刻漏等事

○典醫監 掌醫藥供內用及賜與

○司譯院 掌譯諸方言語

- 世子侍講院 掌侍講經史一規調道義上
- 宗學 掌宗室教誨之任
- 修城禁火司 掌宮城都城修築及救火等事
- 典設司 掌供帳幕
- 豐儲倉 掌米豆草花紙地等物
- 廣興倉 掌百官祿俸
- 典艦司 掌京外舟艦
- 典涓司 掌涓治宮闕之任上
- 內需司 掌內用米布及雜物奴婢
- 昭格署 掌三清星辰醮祭
- 宗廟署 掌守修寢廟
- 社稷署 掌酒掃壇壝
- 平市署 掌下甸檢市店平斗斛丈尺低昂物貨等事
- 司醞署 掌供酒醴
- 義盈庫 掌油蜜黃蠟胡椒等物
- 長興庫 掌席子油花紙地等物
- 水庫 掌藏水

- 署、圖書署、典獄署、活人署、瓦器、歸厚署、內侍府等あり内侍府ハ大内監膳、傳命、守門、掃除の任を掌る其職員左の如し
- 尙膳 從二品二人 尙醴 正三品一人 尙茶 正三品一人 尙藥 從三品尙傳 正四品各二人 尙冊 從四品三人 尙弧 正五品尙幣 從五品尙洗 正六品尙燭 從六品尙炬 正七品各四人 尙設 從七品尙除 正八品各六人 尙門 從八品尙更 正九品各六人 尙苑 從九品五人
- 右抄記する所の皆な文事を任せる官衙職員として其武事を掌る者の左に列記す
- 中樞府 無所掌侍文武掌上官之無所任者
- 領事 一人 判事 二人 知事 六人 同知事 七人 僉知事 八人 經歷 一人 都事 一人
- 五衛都總府 掌治五衛軍務
- 都總官 副總官 共十人 以他官兼經歷 都事 各四人
- 五衛 義興衛 龍驤衛 虎賁衛 忠佐衛 忠武衛
- 將 十二人 上護軍 九人 大護軍 十四人 護軍 十二人 副護軍 五十四人 司直 十四人 副司直 一百二十三人 司果 十五人 部將 二十五人 副司果 百六十七人 司正 五人 副司正 三百

此他掌苑署、司圃署、養賢庫、典牲署、司畜署、造紙署、惠民

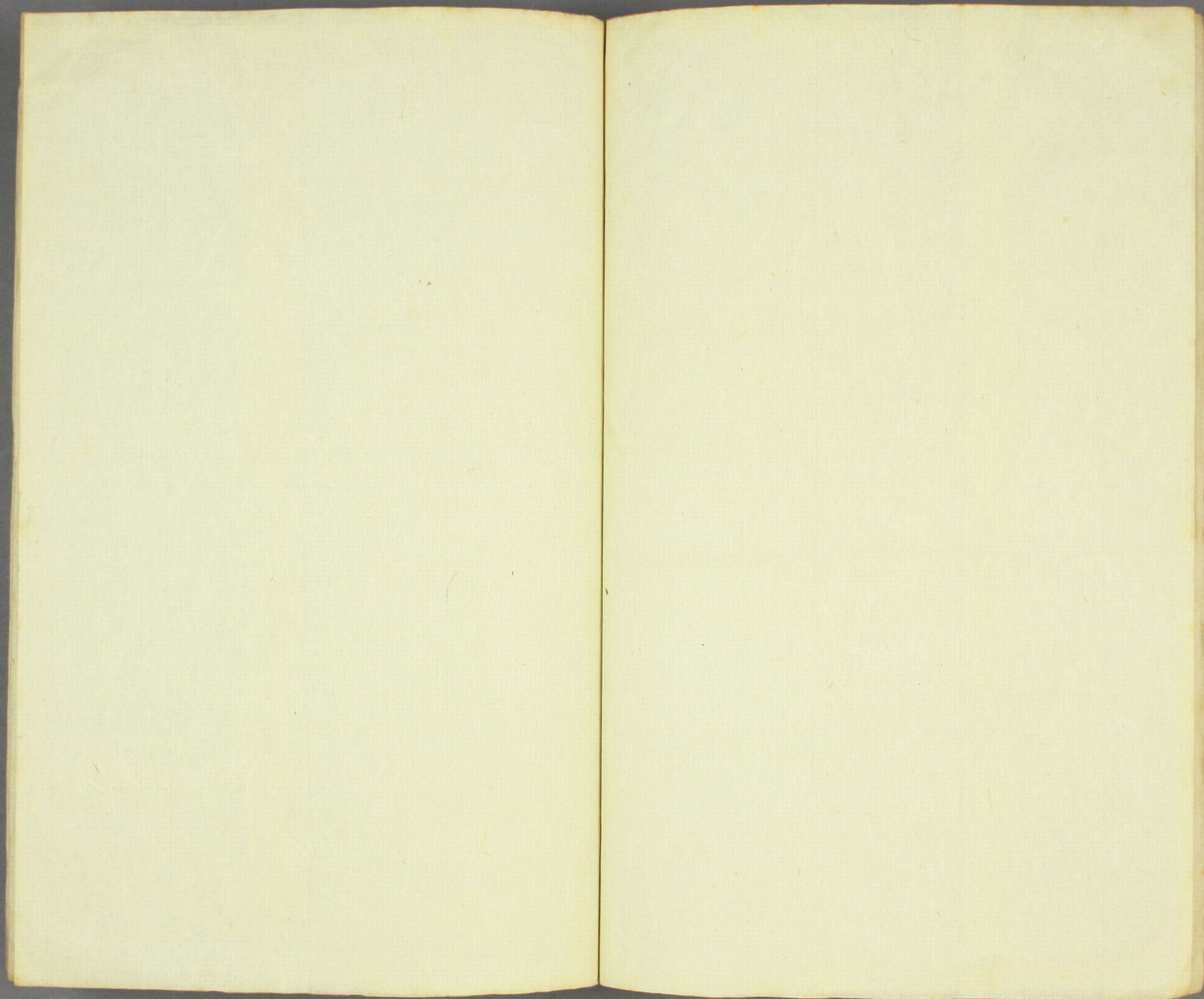
- 九人 司猛 十六人 副司猛 四百八十三人 司勇 四十三人 副司勇 一千九百三十九人
- 內禁衛 將 三人 以他官兼
- 訓練院 掌軍士試才鍊武經習讀之事
- 知事 一人 以他官兼 都正 二人 正 副正 僉正 判官 主簿 參軍 奉事 各三人
- 世子翊衛司 掌陪衛東宮
- 翊衛 司禦 翊贊 衛率 副率 侍直 洗馬 共左右 各一人

此他尙は雜職士官ありと雖とも枚舉に遑わらず朝鮮の國たる州ある凡そ二十一府ある凡そ四十八郡凡八十二縣を置くこと百七十五其内令ある者三十四縣、監ある者百四十一縣なり明の洪武年間李氏國を建て、官制禮義皆な唐宋の制を模倣を地方政の如きも制度の文面上顯るゝ所の者も因て之を評すれハ彬々乎として見る可き者ありと雖とも國庫空乏にして財政實に困難を極むるか故其職有て其事擧らす官吏の俸給の如きも其微少ある幾んど驚愕に堪へし聞く古昔に在てハ俸祿稍や裕かなりしと雖とも秀吉之を討つの後ハ財政の困難救ふ可らず止むを得

す大に官吏の俸祿を減却し今日に至て尙は依然たりと東瀛翁は記せる所も因て其一班を擧ん平議政府三公の如きは之が俸祿を記せるを以て今之を徵する由なしと雖とも從一品官たる左右贊成ハ田米二石六曹の長官たる判書ハ正二品官にして正布十四匹に過ぎず漢城府の判尹ハ麥九石として司憲府の大司憲ハ糙米三十二石かり從一品以上正七品に至る迄の官吏にして田米二石の俸給を受る者多し從七品以下從九品に至る迄の俸給ハ田米一石を以て其例率とて官卑ふして俸祿多きあり官高ふして俸祿少きあり想ふに役得の多寡に依て俸給の多寡を定めし者あらん去れハ賄賂贈遺は類ハ公然之を受て毫も忌憚する所なく之を視て俸給の一部否な重要部と做す斯ハ啻た朝鮮のみ非を支那の如き又本邦維新前の如き皆自然と且つ此風習ハ單に亞細亞諸國に存せず泰西諸邦と雖とも今日に至て尙は之を存する者あり則ち露國の如きは其一例も之て政府ハ官吏の賄賂苞苴を受るを認許し官吏ハ之を以て俸給の一部と見做し公然人ハ語て愧色なし然れとも露國に在てハ賄賂を受るハ定額あり某官ハ居る者の若干ハ賄賂を受るを得可く某職ハ在る者の幾何以上の贈遺を受るを得ると一々定額有て之を起ゆれハ罰せらるると聞け

り想ふに朝鮮の制度整ふと雖とも未だ賄賂を受るの定額
を立るゝ至らざる可し是れ露韓華蠻れ相隔る所以なる乎
呵々

(以下嗣出)



以下全て
白紙

